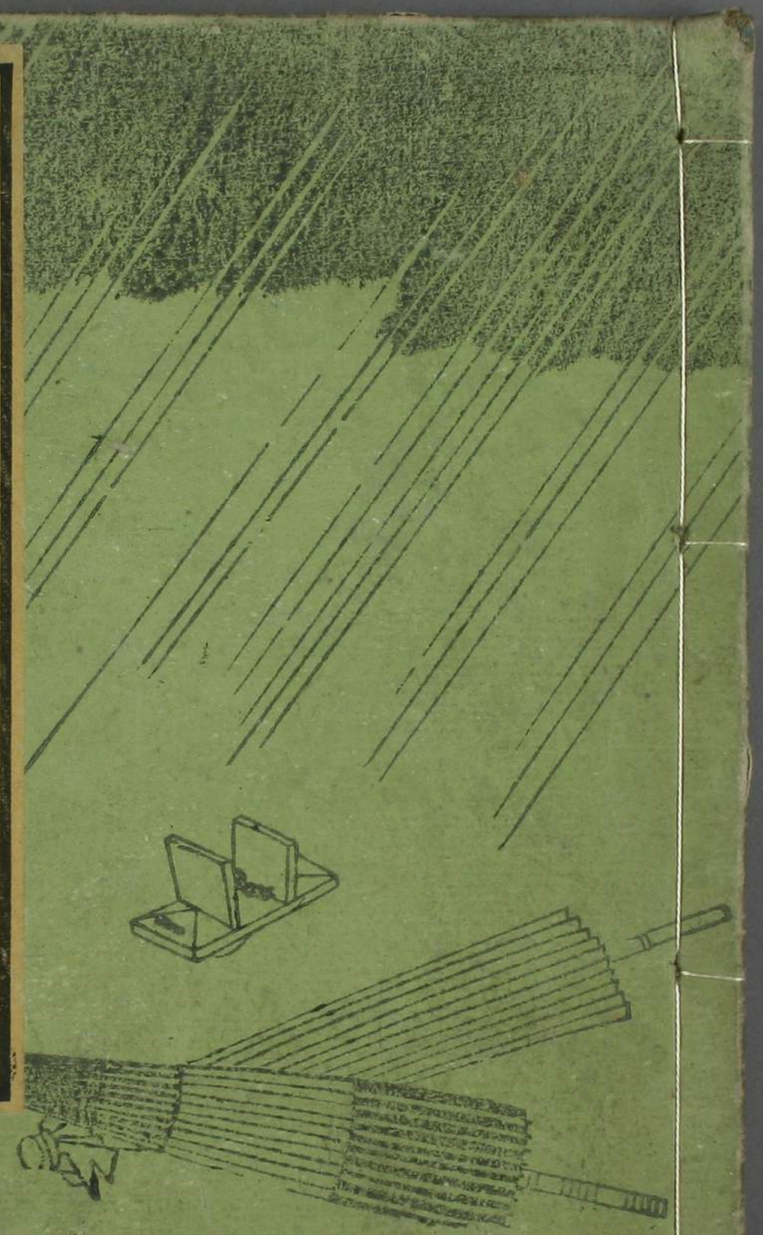
名古屋
山三郎
不破
伴左衛門

絵本稲妻表紙

二

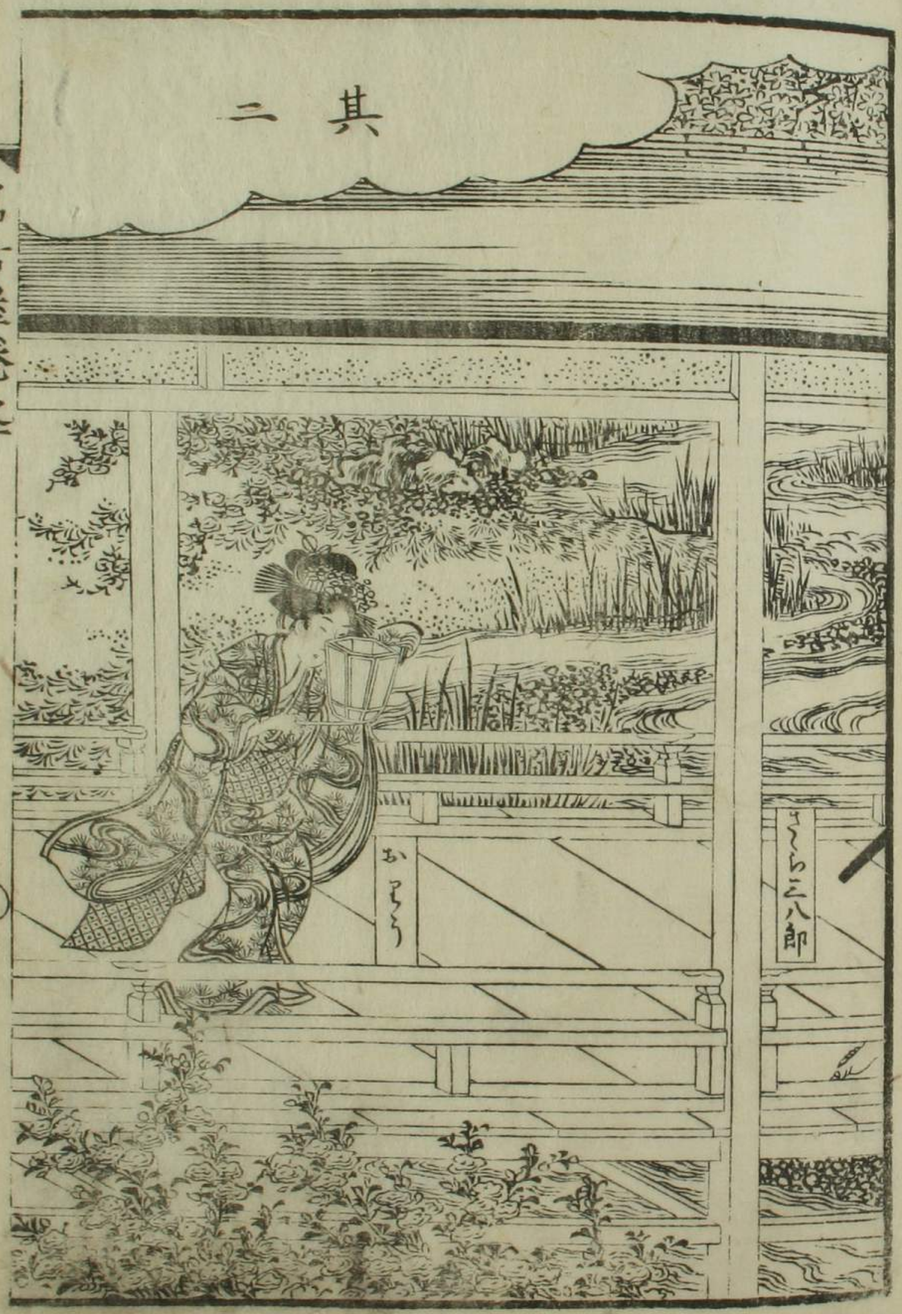


へ13
3151
2

たゞ〳〵胸吟魂さへて。黒暗地獄の罪人が。剣樹ふのがるゝことなくて。三八郎は
ひまどりて。仕損ぜまじと心せゝれ。衣ふらめる蘭麝の。薫る方と心遣
ふ。うゝびをまつ〳〵斬つけゝれば。手ごたへ〳〵呀とさけぶ。仕をまし
きりとゝゝこうけてきるふと。のつまじべ〳〵茂波たまさらる。色ちりふ。
のけさるふるゝ。背後ゝ杉戸くづれ。おしかゝる〳〵噇と倒る時ふ
奥深くたてさる。燈火の光さへ暗くふかゝ〳〵。その形勢とゝる。
無慙やな左袈裟ふ斬さげられ。鮮血泉のごゝ〳〵漏流て。多くち
朱ふ染り。手足とめ〳〵。歯とかゝ〳〵〳〳〳〳苦む体。眼をあて
ゝ。三八郎せめく苦痛とさゝびとひつ。糸かゝて吭ふ。ためのの
刀とさゝをとれを。嗚呼悲哉。嗚呼痛哉。十七歳と一期ゝて黄泉の
鬼とゝりふゝり。ゝて三八郎袖引ちぎりて血刀ふまれ。肌ふしくう

へ13
3151
2
昭和九年九月一九日購

藤波


其二
おてう
さくら三八郎

ろげ。已ふ腹かつきたくんとせしが。俄ふ やりひきあり〜名へいみ〜今死をぐさ命ふあるど。人の及ぐめぬこと幸なり。不破道犬が為体お家を乱ぐべれきぐ〜わり。こんよりぐふ出奔し。權令とあがへて。ようやぐ〜主君の目代ぐなり。彼が悪意を見あり〜。其後は蔦波が所縁の者の。恨の刃ふかりぐ〜死んこそ武士の為なるべしと心をさだめて死骸ふひろ。忠義の為ぐいふあぐ〜。科かをおこぐ無代ふ殺せし。不便さよ。やぐ〜山刀を刃かかぐ。冥途ふおいて分説せんと掌を合せ。南無阿弥陀佛〜と口の裏ふ回向して。退き出んとしる折〜。蔦波が妹の旅姿。姉の下りのいろ〜迷ぐと紫ど。むひの為手燭とりて〜仇の心もあ〜山不まぐ来かぐ。三八郎と顔見合せ。山血ふとおどろきぐ〜。色ぐとくんば。三八郎手ぐや〜刀の鉦打ふ手燭とろ〜と打落し。吻ぐさあ息つきもめんど。又庭つくひふ逃出ぐ。深夜と謂ふ夜嵐まぐ〜烈〜くんば。誰一人くれと知者なりぐ。かくて三八郎我家ふかへり。妻磯菜ふちりぐの支を語り。ぐ〜ぐ〜。其夜そ。ちくくの金子を懐ふ〜。おのぐ今年十二才ふなる楓といふ娘をせおひ。妻ふ七才ふなる栗太郎といふ男子をおりせ。夫婦ぐ手のびやうふ後へ〜ぐ逃出ぐ。四方暗くうて東西を辨ぜど。雨はやつらい降て篠をしるめるがごとくなんぐ。雨衣をぐふ刃ふつけねば。濡衣足ふまぐふつぐ〜歩ぐ〜。素足なんば及ぬ〜ノて心のく前ふ走り刃ハわよへ〜ぐ〜ぐ〜。おがへぐ背後を顧まば。怪哉心火ぐつと燃ぐ。行をやぐ〜ぐと引ぐむ。ようり蔦波ぐ姿かげうふのごくめ〜ぐんく。三八郎山時刃ぐ〜ぐと冷ぐ〜ぐるが。力を抜く斬抜ひ為乃

手をうちゆり〜むりふ（又ちらと炎燃て。花波う姿をくしと立。あり〜と手〜
じをさへうり。妻ゑの目ゆゑ又へれうも。こハ郎が目前ゆいまがろ〜の
ぢ〜つさまとうり。此ふゆ〜りれ被延ふ立〜。斬ど才へど立〜ぢ。勇氣
烈〜きこハ郎も。外うちまびと足ゑぎて走ることゆぢ妻乃
礦業もろうふたぢ〜ひとされ。髪と乱ぎもとと破ま。
外体をくこて倒ま〜が。かり〜心を耐して。百歩ぢうも逃去時。
烈風颯とおろ〜来く。大粒の雨つよを打ぢ〜降かて。園の心火
ゆ〜ゑ遊て来う。ゑゆ〜室中中〜二ゆふ〜ゆ。一ゆハ娘楓が棲ゆ入。一ゆ
ハ栗太郎が懐ゆいりぬ。是乃友蛙が死霊。兄弟の児ゆふつき眠て観る
一端ゆう。ゆくて夫婦うけつまろびつ。ぢ走りふ走り。辛ぢて遥ゆ逃
のび先外体恙ゑぎゑん森びう。山附ゆいうて〜〜風雨おさま

雲うれく臘月さ〜ゑ。草の緑ゆ影うつると便ゆ北山をと扶坂と上り
おまりふ息ゑゆれば。茂林のうちゆいり。夫婦背上うあ人のゑを
おろ〜て岩の上ゆ尻うけ濡衣をたぢり。清水ゆ咽をうるゆ〜ゑ〜て
權ゆ〜ゑ居ゑる折〜も。坂のうへより若うゑ〜しき女ち〜〜髮素足
ふてゆうゑをとびゑ〜と歩こ来ぬ。ゑ〜〜ゑれば行ふゆ〜ん烟の
ゆうふて。壁人のごと〜。人の形ゑるもの。女の前ゆ立。糸のゆうゑる手を
あけ〜さ〜まれ〜ま紙けば女足をゑやゆ〜歩む。まねうざれば女立
ぢまり。頭と傾て物とゆりふさゆゑう。女立ぢまればゆの怪物。又手を
あげてさ〜まれ〜ゆ〜ゑ〜も女。舊榎の下ゆいり權ぢぢてさゆ
と泣居ゑるゆ。ゆの怪物梢とゆびさゆせば。女ゆふざ見てうゑづれゆおかさゆ
と泣涙梢の雫とおちゆゑる。怪物又榎の枝をゆびさ〜。物打ゑる仕方と

佐々良三八郎
藤波城殺し
妻子を具し
逃げ行く途中
かく首縊
女救ふ

妻いそを
ひとりぐ
さくら三八郎
栗太郎

とれば。女うなづき前後を顧つて。やがて腰帯を解き木の枝に打かけうち
三八郎妻らもふ。本蓋の暗所に隠れる。此為体を見て暗に思ひ
彼怪物は世に云ふ死神なるべし。首縊模倣などいふものありて前に縊死
する者の亡魂。樹下にうづまりて。死神とあり。人といざなひて縊しむと。世
の語柄にはつまるでも。眼前見るこれがもどめあり。我忠義の為とも
のにあらず。罪なき茨波を殺せし夏。深し。せめて此
女をたもけく茨波が冥福をもむる種ともなし。怨魂とあざむる便とも
なしてんと思ひうち。彼女西に向ひ掌を合せ念佛数遍となへ
やがて縊死んとすると。かれまたもがと声うけて走り出。背後より抱
きとむ女はおりひかげざる夏なれば打驚き。ふりかへりて死ねばなるぬ者
あれば。なほして死せてよ。折角とひきとりつるものを。二度のふりひきする人

ようとつぶやきて又縊んとすると。もとめ一命を失んとなふがどなれば。
定て迫る夏なんが。まが其縁故を語りゆへ。若我力に及ぶ夏なば。
力を尽して救さくもあらとなり。女情深き詞を聞て方の侍方らい
なつかざれども誠に哀悲深なるのせなり。さらばなり其故を語るこそ。こと
生あがらへがたれ。あれば。仏法に見捨て浮通なるべされかしとのよ。三八郎
かさねていひけるは。なにを知ぞの者なれば。卒尓に語るべきなれど。世の
常言に膝をも談合せとなり夏なり。仏にもあれつまるまで語りゆへしと
誠心面にあらわれけるゆえ。女權思案して左ぞ深き情心を吞下にさん
もいなれば。一通語りてべん。妻は此辺に住武士の浪人の妻なるぞ家
貧さふらうさるべ先祖傳来の物と。金二十両に質入したるを夫の
妹なるもの実ぞ。これを愁ひ二十両の金子と合力して是れ

ゆへ今宵妻ふ彼質物を受りぞ〜まうんと。夫のひつの傍ふよう。金ふを懐ふて出らるゞ。途中ふて盗人ふ出めひ殘〜ぞ奪ひとられ侍り。合力〜〜る妹の手前とゝひ。夫ふ對して分説ゆく。面と合せがとられば繼死ん

と気悟をきらめいありと。愁の色を面ふめ〜〜して語りけるゆへ。こハ郎始終を聞。それなれば死るふおらぬぞ。幸ひ某少くの路銀を携へられば。其金の数ゆど合力つゝ〜〜べ〜〜これふて質物を受ゆ〜〜べ〜〜。金ふ二十両出〜て与ハけるゞ。女これをうけど誠ふ侍ん慈悲の源さん骨身ふとかゝてかゞめ申ども。所縁もあれ侍方より。金ふをまうしうけ〜と夫ふ語べゆゆうて快存じ申ほどさうして語〜〜ぞれば夫を欺ふ似て。女の乃まちたべ〜〜を。いつもの通ふを死れべゆぬ身の因果今宵ふ迫りゆとのひて。

涙灘のごとし。こハ郎其詞を感じて。りつとして悲沢。懐中の金ふ

を財布ゆゞ〜取ゆ〜。かの金とゆ〜ふふ入て地上ふおと。某語て此金とうてふふりかと〜〜つゝを。おん身くゝゞぞ拾〜ゆ。凡乃ふおちゝゝると拾ひ。其主の出ゆゝるとゝ其物をひゝちゆゆゝ。ゆ凡例ふあゝねべ。おん身二十あ乃金ふをうくゝゆゝも恥ゆゝゞぞと。某又与ゆゝ思ゆゝゞぞと。理と尽して与へけるふど。女感涙ちゞまゝゞぞ。おん身のごとく大慈悲の人ハ世ふ又とあるべゝゞぞよも凡人ふてハいまじ。観音菩薩權ふ身と現〜て。妻ゞ救ゆへゆゝわとゝひ。掌を合て再ゝ拝ゝ。ゆゝゆゝ權ふ金を借用いゞ。後日ふ身を售てゆゝゝ。返〜まゆ〜ゞぞん。そも侍身ハいづくの侍方ふて。姓名ハ何とまうしゝゞぞ。妻ゲ夫の姓名つゝ。いそんとせ〜を。こハ郎。いゝふへ〜〜くゝゞめ。ゆゆ〜〜其姓名めゝしゆふゆ。某が姓名もゝふはゞ。素返清を〜〜ゝゝゝふゆ〜ゞぞ。おん身の夫の名と実我名を語ればかのづ

う。恩と著。恩ふ著そるの理ふて某ゞ意ふのゝぞ。涼夜とのひ旅人の身殊ふ足弱と伴ゐといそげバ。ひまどりがゝし。涉縁もめゝべかゝゆて相見ゆべゝとひもゝ。めゝの本蔭ふ走り入べ。女ハ涙を流しつゝ。金と押つゝぶゝてうつゝとゝめ。ちぐゝく跡を仏拝めと来しゝ乃へ急ぎ去ね

三 胸中の機関

さても右近の馬場の館ふおきてハ。其夜芳波が妹於弦。妹の死骸を見つゝて大ふ驚き。恚しゝくよぐゝとけれバ。侍宿の武士ども馳集り。人ふ強動しゝそぐゝしゝく主君の前ふ出てちゝぐゝと告さゝへゝんバ。桂之助ハいてまぐひく那裡ふ到て。芳波が死骸を點検して且驚き且悲ゝ。何者の所為ある哉と疑ひ。先於弦をめゝて哀の様を問ゝるふ。依ゝ良三八郎が殺しゝたるよゝと告る折しも。笹野蟹義いちゝへく

馳来ゝ。百蟹の巻物紛失ゝゝぬとゝを。桂之助益驚き。館中とこまやふ穿鑿めるふ。三八郎家財ハ捨おき。妻子と携て逃去。長谷部雲六も出奔の体ありとゝ申しけるバ。さゝハ彼等ハ人ひ合せて。百蟹の巻物を盗取たりと。芳波ふえとぐめゝまぜんとゝるく害しゝ去ゝるふゝとひゝ。足弱をゝるゝゝれバよゝも遠くハ走るまじ。追人をつゝてゝく捕へゝむゝべゝと命じけるふぞ。四方ふ手分しして追行ゝり。かくて翌朝ふいゝり。追人等立ゝり。いづくへ逃去ぬやん。影ぶふゝへぞと告ゝんバ。桂之助只のゝんゝるぞりゝる。ゝんさゝ不慮の騒動ゝる。取次の侍士まりいで。御国元より。執権不破道犬自身ふのゝ見ゝ。今著駕ゝさゝんゝと告る。桂之助眉をちゝめ先ゝろて仏の沙汰もあんふ。乃太こゝぐゝ上京せゝいゝも心得ぞる夏ゝり。行ゝゆやんと心安ゝゝ。

待居るほ程なく不破道犬旅装束の侍みてうち通るそのさまいふとなれば。惣髪の頭ほ素雪をいただきたれ額ほ老の波をたゝへ。高年といへども身軀たくましく。奸佞の面野狐のごとく。貪欲の眼皂雕ほ類し。相貌きはめて兇悪なり。笹野蟹義。藻屑三平。土子泥助。犬上雁八等。四人の者も。跡ほつゞきまもり出ね。桂之助道犬ほ對面し。先別事といまど。俄の上京行度やん氣づかしとおもせられば。道犬氣の毒敢ほひくるへ。火急の上京別義ほ候ぞ。ちゃごろ君御身持あしく。旅館ほおりて。白拍子を召抱へ妾とする。ひぞうのことなれば虚病をうまへ。佚遊宴楽ほ日を費し。御所の勤仕を怠こりもふはし。官領職濱名入道殿の御実ほ達し。擯斥をべきなり。侍内意あり。若もうせぞんべ。御家ほもあるまじき其罪大殿の御身ほおひもふべ

よりあれば。ぜんをべなり。侍勘尚この侍事あり大殿侍自筆の罪状侍覧あるべとのひ。懐中より一通の状をとり出てさしおけば。桂之助らうめげて讀もおりまど。胸ひしとこたへぶれて大ほ後悔し。只はとうふきこと言あり。道犬かまくいひるへ。笹野蟹義。藻屑三平。土子泥助。犬上雁八等四人の者。君の侍傍ほありあり。侍諫もせぞかつて放埒をもめやすれ條。其罪軽まど。切腹ともあはせつけらるべもるべ。大殿の侍義とはて。後ほより追払へこの裟金ありとこ渡し。けはべ四人の者ほあげ首しもぞよりける。乃太又いもく。只今侍次ほてらけたまられば。佐〻良二八郎。長谷部。雲六とひ合せ昨夜百蟹の巻物を盗こ。侍妾茂波とやうを殺し逃去たるよし。さあれ内乱の起るも總是君の侍行跡よろしからざるがゆえなり。かの巻物ほ侍家乃

重宝とのひ。いまゞ室町御所の浦覽も濟ざれよ。若是なるの
ゆえ。おん愛ふ達。あぶいうなる侍咎めんもなりがゝ。侍痛
ゝくそりへども。そゝくゝ侍立退ひへかゝ。後日其才ふかへても。侍
飯恭める型取ゝゝ。ハヤをだゝ。只恙なくおゝまゝ時の
いるる式待ゐへかの女の死骸ハ縁者を召叫ゝ引渡しひへゝと
いひて。先ゆの是が家来ふ命じゝ四人の者ふ追ひ出せれば。桂之助
もせんかとあく。打ちふか是ゝ出去ける。心のうちふりひ下れく
表かゝ。かくて乃太茂波が縁者をよび。死骸あゝびふ妹於孤
を引渡し。館の財宝雑具をゝふ。おのれが家来をゝめて
守らせ。たゞちふ飯國をいそぐゝ

○後ゝ此時の子細を尋ふ是皆乃太が奸計より出れ

まゝ。近曾由理之助勝基。濱名入道両官領確執とのゝ。入道
勝基を打亡さん結搆専ゝ。ゝ不破道犬濱名入道
ふ内通ゝゝ媚諂官領の權威をかりて。奸計を施し。佐ゝ木の
家を棄ひ。濱名の味方ふゝんと約し。児子伴左衛門其餘
蟹荒弓ふひふくめゝ。桂之助ふ故埒をゝめ。密ゝ濱名ふ
告。内意といゝせゝ勘尚ふゝけしゝ。ひゝぢと蟹荒弓四人の者
と追ゝ。一家中の心をゆるさせ。伴左馬ゝりふ他所ふかくまひ
ふさ。不足ゝ扶助ゝ。ふの是ゝ目代ゝ。内外ゝ立入
計んたゝ。只ふの是弓が一ツ心ゝいでゝるハ。伴左馬茂波
ふ表暮ゝゝると。雲六が巻物ふ盗ゝ逃去たゝと。山二の
ゝゝ

桂之助放伜無懇の
行跡のれふ〻
勘當もべさせし
官領職の内意の
執權不破道犬
上京して其事と
つゝ笹野蟹蔵
等四人が
後門
追拂ふ
不破道犬
土子泥助
さゝの蟹蔵

桂之助
犬上雁八
すくつ三平

四　荒屋の寄計

山城國葛野郡松尾の近さに。梅津の里梅津川といふあり。ここに古歌に詠じたる所あり。その元享の頃此里に梅津豊前の左衛門清景といふ人ありけり。此所の領主なり。家富栄さる武士なりけり。其北月林大幢國師。洛北岩蔵の菴室に招き尊信し法名を是珖と称じ。領所のうちを附与して禪刹とす。今の大梅山長福寺といふ乃是なり。清景の墓今に此寺にあり。初此清景の子孫に梅津嘉門といふ者あり。累代此里に住るが漸くに零落し今嘉門の時に至りて益困窮を。嘉門年いまだ初老にいたれど。聰明聚秀膽力人に過世に希有の英雄なり。曾て六韜三略に眼をさらして。軍畧の妙所をきわめ。弓馬鎗刀のたぐひ。武藝の奥儀

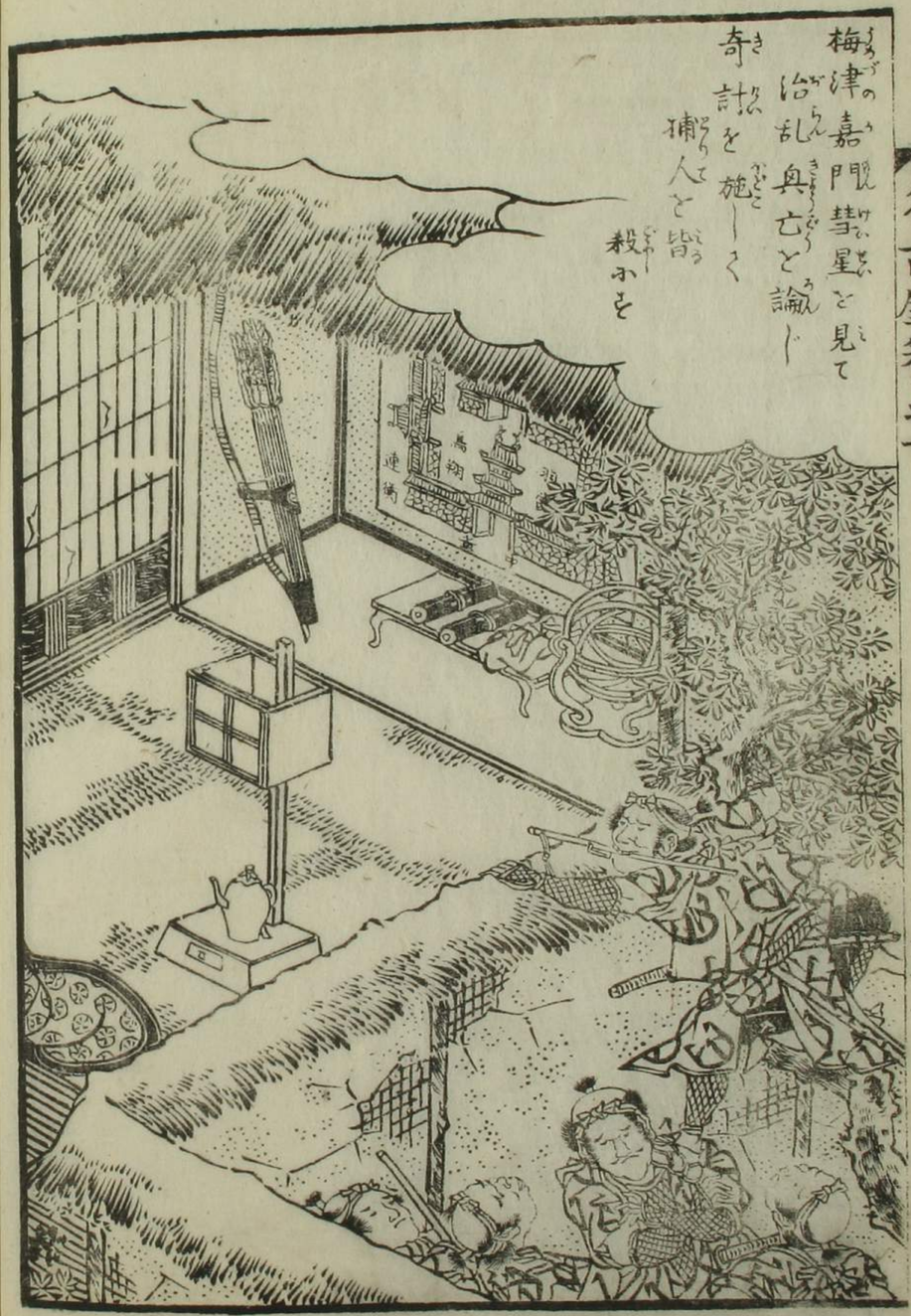
を暁し。天文地理神機妙算進退無二の理を得ざるといふ事なし。その由来に英名かくれなく。高禄を与へんと抱んと。懇望の諸侯おかうりけるが。名利に屈せざるときゝ仕官をのぞまず。常に松尾山のふもと。採薬して薬店にひさぐ。細煙をたて清貧をまもりて。いさゝか奢の心なく。一人の老母に孝行を尽し。姿も斬髪にやつし。いゝまふに先祖清景大幢國師より傳来の禪味をわきまへ世に語らんぬ暮し。実に一世の賢士と知られぬ。母も又賢女にて。今の世にやく治平にあへるも。仕へさきべき明君を心を決し。嘉門が名利屈せざるを紙ひ。てゞ〳〵布と織て日〳〵の費にかへ。いさゝか貪苦と愁を暮しぬ。たゞ一つ須日彗星あらはれ。諸人心安からぬを吉凶を辨ずるあるゝ。一夜嘉門が禄先に立出。かの星をあふぎ見。母をまねきて

いひ伝へ。柿我彗星ハ彗星ハ〜いれたる。皇極天皇の御宇。蘇我の入鹿
叛乱の時。始て出星ハ〜いれ〜ちり。今ハ〜ちまて一度も祥瑞あることな
し。凡彗ハ五ツあり。其色蒼ハ王候破して天子兵革ハ苦し。赤
ときハ凶賊起て国人安〜ず。黄ハ〜ちれハ女色害とあり。白ハ〜ちれハ将
軍叛て兵乱大ハ起る。黒ハ水の精ハて。洪水河ハ溢て五穀登ずあり。
又ハ此度の彗星。其色蒼ハ黄とおびたゝし。まゝ〜ハ牝雞晨し〜く
婦女権を奪。天子兵革ハ苦しむ。前兆ハてハん。母人いハゆ〜おりひ
ゐ〜ゆ〜んとハへば。老母点頭。我もらくハその心つきぬ。花の都狼の
伏土とあ〜んこと遠ハじ。ゆく此所と去り山林ハかくれて。兵乱ハ
避るハ〜ちく〜べ〜〜ぞとハひけるが。ハて後果して應仁の大乱起りぬ。母子
両人の先見誠已ぬ〜〜〜ありとハふべし。ハて頃由理之助勝基濱名

入道両官領ありしぶ。勝基ハ濱名ハ増ハてちく〜さうへ子なのゑ濱名
ハ子と養ひけるが。勝基實子出来ぬ。其養子と僧となれり両家
確執ありて。濱名勝基を打亡し。おのれ〜ハ権威とかしいまハせん
と欲し。密〜野伏浪人ども召抱ゆるが。嘉門ハ軍畧ハ達しゆるゆと
実ハしび。召抱んと使者を以ていひへり。嘉門ハ兼てへるが行跡をふく
み居たりしハ。使者れのぶる所専官領職の権威とふるハ。無礼の詞ハか
りければ。嘉門心中ハ憤。招ハ應ぜざるのゆへ。ハて入乃ハ日来の
不乃とかぞへてさ〜〜辱め。きび〜〜いひゆるちゆるハぞ。使者面目と
失ひかり〜の体ハて立帰る。入乃ハ嘉門ハいひつる様と。おりゆさまハ
告ぬこと。入乃実もあへぞ大ハ憤発し。やとれハくさ腐儒者めうか。
憂目とゑせて後悔させんと。家来岩坂猪之八こハ荒男ハ大力ハ

組子二十餘人を撰与へ。彼奴も智謀武術小秀る者あれば若手ふあまらば首ふして持こんと命ぜ。血氣ふ[illegible]る猪之八かしこしりと答へ。小具足ふ身をかためて。彼奴たちへ楠が智をたくひ義経の早業と得たりとも。瘦浪人の分際にて行ひのあるめーん。黄土小屋と踏つふ首をぢつさかてかくくんと廣言吐ば。思慮もなき組子等いさ〻ちて相ちるぶ梅津の里へ急ぎく鳴呼嘉門が身のうへ危うき次第なり此時宵間の夜あり けるが。猪之八等嘉門が家ふ近づく比月影めぐりて明あり。嘉門ハ燈下ふ書を讀壁人ありて障子ふうつりてたしかふ見ゆ。太で打砧の音さるい老母の手業とおぼし。猪之八等ハ竹林のうちふ身をひそめ。權便宜とうかゞひ居るふ。嘉門宿鳥の鳴さつぐとゆめつけ。ある笑止や我推量ふたがハぢ。命ちゝぞの愚人ども。我家を襲とみゞへ

たりゝいで皆殺しふまくくまんぞと。灯火ふきけして其後音も臣。猪之八これと好。ふくさ奴わが[illegible]ぞ。[illegible]ゝ搦捕て手柄ふせよ者ども下知しつ。先ふ[illegible]て門外ふ[illegible]ゝ邑高これハ官領職の叢命とかゝふり。嘉門をめし捕ん岩坂猪之八もゝ[illegible]ゝ。いそぎ門をひらけ。尋常ふ縄かゝるとよゞれば。障子のうちふ呵くと笑邑し。汝等ごとき亂輩ハおろかたゝ。濱名入道こゞ[illegible]ゝ数百騎を以て攻るとも更ふかそゝ所る。嘉門が居宅ハ鉄壁石門要害堅固の城郭も同然なり。命ゝくハ頭をおさへてもゆく逃[illegible]れとわざとうつ。猪之八等大ふ怒門とひゝかんとそゝふ堅こゞたりゝ。[illegible]ゝ力をきはめくゞつ押ふ。不ぞゆるまりてくろぐと。[illegible]ゝ踏破り。大勢一度かこと入て椽の上ふ充上り。障子とゝろと[illegible]ゝけば。一間成[illegible]て梅津嘉門


梅津の嘉門彗星を見て
治乱興亡を論じ
奇計を施しく
捕人を皆
殺ふを

萌黄薫の頭巻のうへふ。金紗の道服を著し。金作の圓鞘の太刀弦
くれ。手ふ文曲武曲の二星を画くる軍扇をとりて床机ふかりたれ
敢勢。志氣堂々威風凛々うて。いうふも一個の英雄とこへくるう
老母ハふるびたれど。摺箔の昔摸様の袿衣を壺折て著し。雪をあざ
むく白髪をれ。玉だれをかけてうぐ〳〵打拾。銀の蛭巻ふる長刀
と小脇ふいとゝて。傍ふひえたる姿。老木の梅ふいふ〳〵への薫殘りて
奥ゆしい。左の方ふ千金弩と称して。一發数十の箭を発て兵器弦
を点。右ふい近頃蠻國より渡る。磐石をも打碎く火術の具。五六挺
筒先をそろへてゐべり。勢こゝろる組子ども発道具ふ心おくれ。
きゝめたるを見て猪之八邑と励し。賦甲斐ある者ども。みづ
ふ嘉門一人の外いかゝうき老女ありたゝ三面六臂ありとも。いうぐう

数くの箭玉とゝゝうことゆさうんやぷんせうけどうの具おそる
ふたゝどぷゝよりて搦捕若ゝり逃さじ我〳〵ダ銃夜ありと下知
そるふぞ。組子ども げふをさうとゝ我先とわゝそふ発ゆらんと
ちゝる喧ふ。嘉門軍扇をあげて一めふぎめあげバ。兼て用意の焔硝
縄ふ燈火ゝうり。綱火ゝゝうて五六挺の火術の具。一度ふ發し。其の
ひゞれ大雷のごゝく。数の鉄丸発出て。前ふをゝたる組子十余人
打倒さん。煙のうちふのたり伏をぷ。老母ハ長刀の鐔を以て弩を二つ発
けゝ。数十の箭雨のごゝく発ゆゝて。組子を殘らず射伏ゝり。
猪之八ハ手ぐゆく弩を脇ふして箭玉とのがん。逃ぬんとゝゝうれふ
怨板敷磊落ひるがゝり。深き落し穴のうちふ噇とおちいり。底ふ点
たる剣ふ身をつゝぬうれ。果ふ深りて死ゝてゝり。嘉門ゆゝく兒等の

かまへてこゝにおきてゝる由をいうあれがこんまで近国他国の諸侯乃
請待ふ應ぜざれば。若おのれが器量をねたゝ。不意を襲ふ者のゝん
とふせぐん為あるが。果して此度不慮の難義をまぬがれうさて
嘉門老母かむく。今宵のうち式内濱名入道益怒多勢を以
てうちかこまんのがゝてだてあらんべゝ幸母人為て山林ふ身を避
く生涯無事を計ん侍心あれば。今宵中ふ此所をのがれ去ふ
あらじ。母人いかゞおわをやゝんとゝふ。老母その意ふ同じ。母ふ去人
いそぐいゝく引支度して雑具ハ其侭ゝておき。先祖傳来り兵
家の秘書大憧國師の法語一巻のみと嘉門が懐ふ。老母を背負
くゝつくもゝおちゆくそり

巻之一終